

県内シルバーマイスター

技あり

ち密な細工で雨や日差しから頭部を守る、農作業に欠かせない道具だった菅笠。男鹿市五里合の琴川地区に伝わる良質な菅笠の制作技術を受け継ぎ、地区の「名人」と一目置かれているのが武田ノブ子さん(82)だ。同地区では、笠の骨格となる竹の切り出しや竹割りといった力のいる仕事は男性、スゲの

菅笠作り

縫い付けなど細かい仕事は女性という役割分担がある中で、武田さんは一人ですべての作業をこなしてきた。

旧若美町出身の武田さんが菅笠作りを始めたのは1996年、地元の人々からクラブを母体とする「琴川伝承同好会」に入会してからだ。「嫁に来て、琴川の菅笠に興味があったので」と武田さん。男女16人で笠を作る年数回の集まりが毎年の楽しみとなった。

スゲは湿地に生える草で、葉の幅が広く、丈夫。高さが2層ほどになる入梅のころに刈り取り、雨や露に注意を払いながら天日干しする。稲刈りが終わって冬支度を済ませると、夏に乾燥させておいたスゲを使って笠作りに取り掛かる。

まずは竹を曲げて輪にし、笠の縁を作る。この輪に6本の竹を放射状に渡し骨組みとする。被ったときの傾斜を決める工程であり、ある程度の力が必要

全工程、一人で作業



菅笠のすべての工程をこなしてきた名人の武田さん

武田 ノブ子さん(82) 男鹿市五里合

要だ。本来ならば男性の役割だが、好奇心旺盛な武田さんは見よう見まねで竹の扱い方を習得していった。

次の段階で、6本の竹に細いスゲを

りも速く仕上がる。経験量に裏打ちされているのではないかと話す。

菅笠作りの技術は、江戸時代、加賀の国(石川県)から北前船を通じて同地区にも伝わったとされる。琴川は良質なスゲが自生するほか、取れる竹もしなやかで、農閑期の副業として定着した。脇本や若美、北浦といった地区では、農作業中の日よけや傘代わりに琴川の菅笠が重宝された。戦後、麦わら帽子などが普及すると、程なくして菅笠は使われなくなった。

同好会も高齢化が進み、昨年度で解散。「材料があれば作れるけれども、スゲの管理や材料を運ぶ力仕事は元のメンバーだけではとても続けられない」。武田さんは菅笠用に保存しておいたスゲの束を見詰めながら少し声の調子を落とした。

裏をのぞくと、ち密な細工がうかがえる菅笠。写真は祭り用で、骨の本数が多い

同好会の活動拠点だった琴川公民館の入り口には、以前のにぎわいを懐かしむかのように菅笠が飾られている。

